金融システム研究会報告（高田太久吉）　　2015/09/12

８月も残すところ１日となり、次回研究会が近づいてきました。
前回の御相談の通り、次回研究会では、ディミトリス他の『現代資本主義の危機と政治経済学』を取り上げます。以前に、高田の摘訳のファイルを送りましたが、最近私のホームページ(takuyoshi takada's home または、http://www.takuyoshi.sakura.ne.jp)「資料・翻訳」欄にアップロードしました。まだ御覧になっていないか、お手元にコピーのない参加者は、そこでご覧になるか、印刷してください。

なお、本書はマルクス『資本論』とりわけ第三巻第 5 編の新しい読解をふまえて、現代の金融化を資本主義の歴史的発展の文脈の中で把握するためのさまざまな論点を提示しております。その意味で、本書はマルクス経済学の立場からの本格的な金融化論であり、高田『マルクス経済学と金融化論』（新日本出版社、2015）、とくに第１０章の理論部分と照応する興味深い論点が――論述はやや難解ですが――数多く展開されています。これが、今回本書を取り上げる理由です。

本書はマルクス信用論と金融化に関する多くの重要な理論的論点を提示していますが、それらの中で、次回研究会で取り上げたい主要な論点は、以下の通りです。

(1)現代資本主義の顕著な特徴をなす「（経済の）金融化」を、資本主義の歴史的発展経路（段階）の中で、どのように位置づけるのか。それは、資本主義の在るべき、あるいは本来の、健全な、発展経路からの何らかの逸脱、あるいは乖離なのか、それとも、資本の内在的性質（資本の論理）から歴史的に派生した、必然的なあるいはむしろ本来的な現象なのか。現代資本主義の金融化現象を批判的に論じる多くの研究者（ポストケインジアンだけではなくマルクス経済学の陣営でも）は、金融化をケインズ主義からポストケインズ主義に変質した独占段階における資本主義が陥った、あるいはやむなく踏み込んだ、不健全な経路として取り扱う立場が支配的である。しかし、このような立場は『資本論』が想定しない「健全な資本主義の発展経路」を想定しており、その妥当性をマルクス自身の論述に立ち返って吟味する必要がある。さらに派生的な論点として、現代流布している金融化論の主要な理論枠組みが、マルクス経済学の理論枠組みの中に整合的に組み込むことができるのか、さらに、金融化はこれまでのところ共通の定義が与えられていないが、この用語を適切に定義することができるのか。さらに、本書の金融化についての基本的理解によれば、「金融化は資本制的権力を組織化するための新しい技術」と規定されるが、このような本書の認識は金融化研究において有効なのか。

(2)上記の設問に応えるためには、資本の本性（資本の論理）と、資本がそれ自体の本性に

もとづいて展開する具体的な諸形態を把握する必要があるが、金融化を主導する貨幣資本（利子生み資本）や架空資本は、資本のさまざまな範疇の中でどのように位置づけられるのか。本書によれば、マルクスが『資本論』第三巻で考察した利子生み資本は、産業資本および商業資本と並ぶ（区別される）、資本の第三の、独自の範疇ではなく、産業資本や商業資本（商人資本）をその契機として包括する、資本のもっとも一般的（具体的な）な形態と考えるべきである。これは、通説的な『資本論』解釈と大きく異なった特異な解釈と思われるが、『資本論』の利子生み資本論を本書のように読解することは妥当であろうか。また、このような本書の解釈は、利子生み資本（銀行資本をふくむ）は現実資本の剰余価値生産に資する役割を果たすか否かに関わりなく、それ自体架空資本である、さらに、資本はその完成された形態（剰余価値を生むという使用価値を備え、資本還元によって市場価値を獲得した商品としての資本）では産業資本であれ、商業資本であれ、一般に架空資本であるという本書の言明についてどのように評価すべきか。

⑶近年の金融化論がマルクス経済学に提起する根本的な理論的問題――金融を通じての資本の価値増殖、あるいは、現代資本主義のもとで顕著に増大する金融的利得をどのように説明するのか――についての本書の大胆な言明について。通説的な『資本論』理解では、資本がビジネスとして行う金融仲介業務は不生産的活動であり、金融産業に従事する労働者は価値を創造しない不生産的労働を行っており、したがって金融産業が上げる金融的利得や金融労働者が手にする賃金は、産業資本の生産過程で生み出された剰余価値の横取り、あるいは再分配と考えられている。これに対して、本書は、資本に利潤をもたらす全ての賃労働を資本制的生産関係のもとでの「生産的労働」と規定し、この立場から、金融活動に従事する労働者の労働もまた、それ自体が資本に剰余価値をもたらす生産的労働であると言明している。そもそも、生産的労働、資本の生産的活動とは、如何なる労働、活動であるのか。この論点は、これまでさまざまな論争を生み出してきた論点であるが、単に労働価値説の理解だけではなく、上記⑵の論点――利子生み資本こそ資本のもっとも一般的で具体的な形態――とも密接に関連している。さらに、この論点は賃労働によって担われるサービス労働や金融労働の価値増殖機能を容認することによって、資本の有機的構成の高度化から利潤率の傾向的低下法則を論証する『資本論』の重要な論点とも抵触する内容を孕んでいる。

⑷金融労働が価値を生むか否かという論点は、架空資本の「価値」を労働価値説に照らしてどのように理解するのかという架空資本論の基本的問題と関連している。マルクス/エンゲルス（？）は『資本論』第三巻第 25 章のタイトルを「信用と架空資本」としているが、この章では架空資本について立ち入った論述はしていない。マルクスが架空資本論について在る程度まとまった記述を残しているのは第２９章の「銀行資本の構成諸成分」においてである。ここでマルクスは架空資本の価値が「資本還元された収益」であるという、お

そらく当時すでにロンドンの金融家達の間で共有されていたビジネス慣行について言及しているが、このような慣行を資本のフェティシズムとして取り扱うにとどまり、それ以上の考察を行っていない。マルクスのこの論述を継承して、目覚ましく発展した株式市場を考察したヒルファーディング『金融資本論』を例外として、その後のマルクス経済学では、架空資本と資本還元の問題はきわめて不十分な理論的取り扱いしか受けてこなかった（日本では、川合一郎『株式価格形成の理論――擬制資本の研究――』（日本評論新社 1960 年）が先駆的研究と言える）。しかし、近年の金融化論の業績が示しているように、現代資本主義の運動を、発展した架空資本論を度外視して分析することは困難である。その場合、架空資本論とそれに付随する資本還元論は、マルクス経済学の体系全体の中でどのように位置づけられ、どのように展開されるべきなのか。架空資本は、産業資本の蓄積運動とどのように関わっているのか、それは「実体的」な産業資本の単なる想像上のコピーなのか、それとも、それ自体「独自の商品」であると同時に、価値増殖する価値としての資本の正当な発展形態であるのか。この論点は、ヒルファーディングの金融資本概念の新しい（非レーニン的な）解釈と再評価の動きを促しているが、これをどのように評価するか。

(5)マルクス経済学の通説的理解によれば、架空資本の「価値」を規定する「資本還元（資本化）」は、資本の現実の価値（産業資本や商業資本が運用する現実の資本や商品の価値、あるいは、これらの形態で実際に前貸し（投下）された貨幣価値）とは無関係な、資本の物神性が資本家（投資家）の意識をゆがめた結果生じる無内容な「計算問題」にすぎず、したがって、資本還元によって生じる架空資本の価値は、現実性の無い「虚の(virtual)」「架空の(fictitious)」あるいは「幻想上の(illusional)」価値にすぎない。これに対して、本書の著者達によれば、資本還元は資本の内在的性質――物神性はその本質的な一側面――から派生し、資本制的生産関係の本質を表しており、産業資本をふくむ資本のあらゆる形態の運動を規定するリアルな「資本の論理」そのもの、言い換えれば資本の重要な運動法則と見なされる。そもそも、「商品としての資本」の運動は、その価値を規定する資本還元を度外視すると、どのような法則によって規定されるのか、あるいは、それは如何なる法則によっても規定されない――商品でありながら、自身の価値法則を持たない――完全にランダムな自己運動と解すべきなのか。商品としての架空資本の価格を規定する価値法則がまったく存在しないとすれば、バブルとその崩壊とは、どのように理論的な説明が可能なのであろうか、これらの論点は、上記(1)～(4)のすべての論点とそれぞれ密接に関連している。

(6)多くのマルクス経済学者にとって、現代の金融市場を顕著に特徴づけているデリバティブ市場の急激な拡大は、資本主義が生産力の急速な発展とその恩恵としての文明化作用によって特徴づけられる健全な発展の限界に達し、その存続のために本来の歴史的軌道から逸脱して腐朽性、寄生性、投機性をあらわにしている結果として捉えられている。これに対して、本書の著者たちによれば、デリバティブ市場は資本主義の発展の本質的な一契機

であり、ほとんど資本主義の歴史とともに古く、資本の活動がさまざまな信用に依存する限り（資本の価値増殖過程が「リスク」を伴う信用を不可欠の契機として含まざるを得ない限り）リスク管理の仕組みとしてのデリバティブへの依存は不可欠の要件である。この点で、かれらは、デリバティブをリスク一般の商品化として理論化するブライアン/ラファティの議論(Bryan & Rafatty, Capitalism with Derivatives)に接近している。さらに、かれらはデリバティブが架空資本の形態で、市場で取引される事実に着目し、デリバティブ事態を架空資本の新しい形態として捉える点で、高田の議論（高田『マルクス経済学と金融化論』第 8 章「現代資本主義の蓄積様式とデリバティブ市場」）と同じ理解に達している。本書におけるデリバティブ理解から派生するさらに重要な論点は、今日見られる金融化がデリバティブ市場の発展なしには生じえなかったという主張である。報告者（高田）の理解では、これはマルクス経済学の立場から金融化を議論する際に念頭におくべききわめて重要な論点であろうと思われる。

(7)マルクス経済学は、現代資本主義の歴史的特徴づけに際して IT 化の問題を重視しているにも関わらず、伝統的に情報の理論的分析を苦手にしてきたと言える。これは、情報と言う用語の多義性――例えば、情報と知識の違い――も一因と考えられるが、「商品」としての情報が、『資本論』第一巻での商品（フィジカルな使用価値をもった有形の商品）分析および、そのような有形商品の価値を対象とする労働価値論と単純には整合させられないという事情があるのではないかと考えられる。他方、周知のように、「情報の経済学」を自称する現代経済学の有力な系譜では、情報の非対称性が経済理論の枠組みで中心的な位置を与えられている。また、さまざまな市場リスクを重視する現代ファイナンス論では、情報の不完備性とそれがもたらす不確実性をどのように評価し、数量化するかが、決定的に重要な理論問題になっている。このような経済学の現状を念頭に置いて、本書の著者たちは、金融市場における情報の不完全性は資本による金融の利用、あるいはリスク管理における致命的な問題ではないと論じている。彼らが重視する、資本が金融市場の作用を介して企業、家計、政府の行動を資本の論理（金融の論理）に従属させるという「金融権力論」の立場からは、金融市場で利用可能な情報が不完全であるという事実は、致命的障害ではなく、副次的な問題である。金融権力論の立場からもっとも重要なことは、企業、投資家、家計、公的機関その他の市場参加者が、一般に金融の論理に基づいて判断し、行動すること――これによって金融の論理が市場を、ひいては経済全体の運行を規定する――であり、そうした判断のよりどころとなる情報が正確であるか否か――もとより、将来予想に利用される情報は正確ではありえない――は、金融権力の作用を基本的に阻害する問題ではない。マルクス経済学が情報化と金融化が顕著に進展した現代資本主義を理論的に考察する場合、経済的概念として情報をどのように規定し、理論化する必要があるのか。

報告者がとりあえず念頭に置いているのは以上の論点ですが、参加者は以上に関わらず、

高田の摘訳、および原書（英文タイトルで入力し、ダウンロード可能）を参照して、金融化論の理解に関連する他の論点を積極的に提起してください。

なお、参考文献としてつぎの論文を挙げておきます。事前にお目通しをいただければ、より有益な議論ができると思います。

(1)Lapatsioras, Sotiropoulos, Milios, Marxist Theory, Financial System and Crisis of 2008, online.（書誌情報不詳）

(2)D.Soriropoulos & S. Lapatsioras, Financialization and Marx: Some Reflections on Bryan's, Martin's and Rafferty's Argument, *Review of Radical Political Economics,* 2014, Vol.46(1).

(3)S. Lapatsioras, J.Milios and D. Sotiropoulos, Beyond Capitalism: Strategies for a Good Society in the "Era of Financialization"、online. （書誌情報不詳）

(4)D.P. Sotiropoulos, Hilferding on Derivatives, *European Journal of History of Economic Thought*, 2015.

(5) D.P. Sotiropoulos & J. Rutterford, Performativity and Financial Markets: Option Pricing in the Late 19th Century, IKD Working Paper. Online.

(6) Arturo Guillén, Financialization and Financial Profit, paper presented at the fourth annual conference on Political Economy Activism and Alternative Ecnomic Strategies, July 2013.

(7) Christopher Arthur, Value and Money, in F.Moseley(ed), Marx's Theory of Money: Modern Appraisals(2005) この論文集も、全文ダウンロード可能です。

(7) Geoff Mann. Value, After Lehman and Before Flood, [Geoffm@sfu.ca] Historical Materialism, 18(2010).